

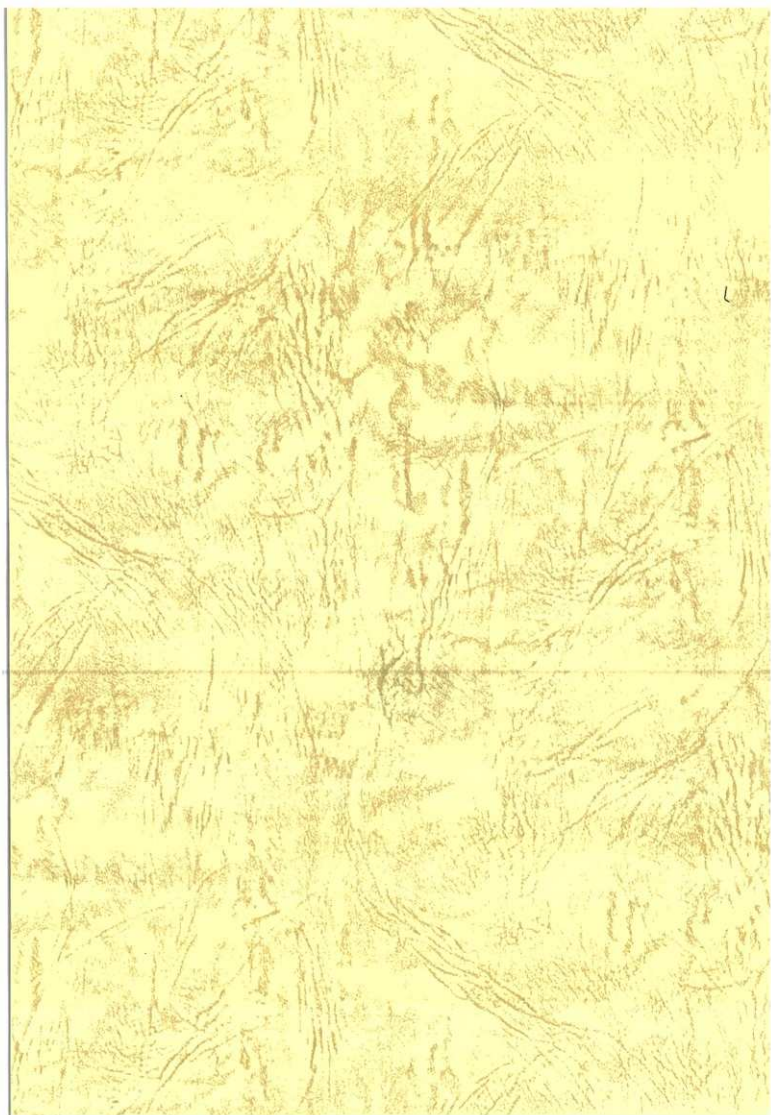
伊都国歴史博物館

紀 要

第2号



2007



序

平成18年度は、私ども伊都国歴史博物館にとりまして、大きな節目になる一年でした。と申しますのは、まず、当館の展示品の目玉である平原遺跡1号墓出土品が、6月9日付で一括して国宝に昇格したことです。そして、それを記念して、秋には、特別展「大鏡が映した世界」を開催しました。さらに、それに先立つ3月18日には、当館との一体的な活用を旨としている「平原歴史公園」が竣工しました。お蔭様で、これら一連の出来事に対して、市内外の多くの方々から好評を博しています。

さて、当紀要は、創刊号の序でも述べましたように、当館学芸員の日常的な調査・研究活動の成果を世に問うものであります。今回は上述しました諸活動と係わりの深い「銅鏡」がキーワードになる論文と資料紹介を内容としています。そのうち、論文2編は、「大鏡が映した世界」展における銅鏡の展示と図録の製作の過程で生じた問題点を発展させたものです。資料紹介は今回がはじめての試みですが、今後とも続けていきたいと思っています。

最後に本紀要をご活用いただく皆さまには、内容に関しまして忌憚のないご指導とご批判をいただきますよう、お願い申し上げます。

平成19年3月31日

伊都国歴史博物館

館長 西谷 正

目 次

破碎鏡と破鏡の時期的変遷とその認識	平尾和久・・・・・・・・ 1
国内出上の蝙蝠座銚内行花文鏡についての一考察 —福岡県前原市潤地頭給遺跡出土鏡を中心として—	江野道和・・・・・・・・ 15
泊一区出土獣帯鏡について	岡部裕俊・・・・・・・・ 23

破砕鏡と破鏡の時期的変遷とその認識

平尾 和久 (伊都国歴史博物館)

I はじめに

糸島地域は弥生時代後期に入っても墳墓に銅鏡を副葬する地域である。三雲南小路遺跡・井原鏡溝遺跡には多くの完形鏡を副葬し、平原1号墓では覆乱内の銅鏡4面は不明ながらも、方格規矩鏡を中心とする36面の銅鏡が破砕された状態で出土している。しかし、このような棺外墓域内における銅鏡の多数破砕例は乏しく、いままでも例外的に扱われることが多かった。

そこで、本稿では、平原1号墓出土破砕鏡の性格解明の一助とするため、破鏡と破砕鏡の今日的状況を振り返りつつ、各地域における銅鏡の認識の変遷について検討していく。

II 完形鏡・破鏡・破砕鏡

用語については先学に従う。

完形鏡は完形のまま使用される銅鏡で、弥生時代では出土する地域が限定される。

破鏡は弥生時代後期～古墳時代前期の日本列島で特徴的にみられ、後漢鏡を主体とするものである。それらは一定期間破片の状態で使用され、破断面の研磨や穿孔が施されたものが多い(辻田2005a)。その中で研磨や穿孔が認められないものを鏡片として区別することがある(森岡2005)、本稿ではまとめて破鏡として取り扱い、

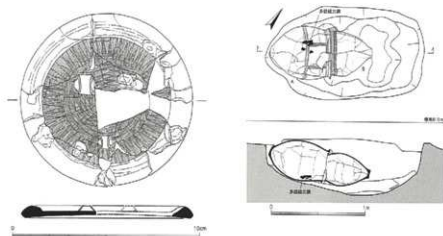
必要に応じて区分する。

破砕鏡は弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、葬送儀礼の中で銅鏡(完形鏡もしくは破鏡)を意図的に割り、齧砕・破棄するものである(小山田1992)。なお、破砕鏡は銅鏡が使用された状態を示す用語であるため、不時発見のものや調査事例が古いものなどのように、確実には破砕鏡といえない例も存在する。本稿では基本的に銅鏡の出土状況等で破砕行為が確認されるものを対象とするが、必要に応じて境界付近にある資料も参考として用いることにする。

III 破砕鏡の展開

破砕鏡の風習は北部九州に始まる。増田遺跡6242号妻棺墓は弥生時代中期前半のもので、棺内から多鈕細文鏡が割れた状態で出土した(第1図 西田編2000)。この銅鏡が破砕鏡であるならば、銅鏡の破砕は空間の問題から棺内ではなく、妻棺の周辺、もしくは他の場所で行われたと考えられる。また、鏡自体も完形に復元できないことから、破片の持ち出しが行われた可能性もある。

なお、破砕鏡は弥生時代後期に至るまで増田例に継続する事例は現在のところ認められない。二塚山遺跡76号妻棺墓は弥生時代後期前半のもので、



第1図 増田遺跡6242号妻棺出土多鈕細文鏡(左)と妻棺出土状況実測図(右) (1/2・1/40)

壮年女性を被葬者とする（高島・七田編1979）。銅鏡は下裏口縁部粘土目張り中およびその直下、被葬者頭部左上から、破砕されて約10片に分かれた状態で出土した。鏡式は連弧文昭明鏡である。また、29号土塚墓でも粘土目張り中およびその直下、被葬者の頭部左上に破砕された状態の波文縁帯鏡が確認されている。いずれの銅鏡もほぼ完形に復元されるものの一部分欠損が認められるため、増田例と同様に棺の周辺で銅鏡の破砕行為を行い、鏡片を抜き取り、残りを目張り粘土の中などに入れたものと考えられる。

高津尾遺跡16区40号土塚墓では破鏡として用いられた3/4程度の大きさの方格規矩鏡を破砕し、胸部・腹部・足元に分けて副葬している（柴尾編1991）。時期は弥生時代後期後半～終末期。このような破鏡の破砕は高津尾例のほかに羽根戸南古墳群G3号墳（米倉編2001）や阿志岐B群24号墳（山野編1982）などのように古墳時代前期までみられる。

原田遺跡葬群Cの1号箱式石棺墓では、床面中央部に一段下がる小部屋を設け、破砕された単雙鏡（原田C鏡）と中央部から折られた鉄剣を納め、蓋として板石が置かれていた（福島編1987）。単雙鏡は十数片に割れており、外区の一部が欠けている（第2図）。また、原田遺跡葬群Aの石蓋土塚墓から出土した内行花文鏡（原田A鏡）の表裏には、穿孔が途中で施された痕跡が残されている。

これらに前田山遺跡9号石棺墓出土の外区を一部欠く内行花文鏡（破断面を研磨する。長嶺編1987）を加えて破鏡製作の順序を検討した藤丸昭八郎氏は、一部が切り取られたように欠落する銅鏡は、完形の鏡の表裏から穿孔を施し、分割したものとした（藤丸1993）。

しかし、柳田康雄氏は原田A鏡のように意図的に貫通しない穿孔が多く見られるものを破砕鏡の一分類として捉えており（柳田2005）、見解が分かれるところであるが、前田山鏡の存在、また最近指摘された老司古墳3号石室出土三角縁神獸鏡片が、悪用用の穿孔のほかに、外区を意図する大きさに整えるための穿孔痕を持つことから（辻田2005 a）、基本的には鏡分割用の穿孔と捉えておきたい。

最近の調査事例として井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓がある（江崎・横崎編2006）。墓壙の大部分が調査区外に伸びているが、幅2.8m×長さ1.02+ α mを測る。棺は刳抜形木棺で、蓋をかぶせたあとに、ガラス小玉を撒いている。銅鏡は方格規矩鏡で、棺外墓壙内で破砕された状態で出土した。本例は弥生時代後期中頃に位置付けられる（第3図）。

平原1号墓は昭和40（1965）年に発見された墳丘墓で、東西13m、南北9.5mの範囲の一部を除き、幅2m前後の周溝が巡る。墓壙は墳丘の東北寄りに設けられ、東西4.6m、南北3.5mを測る。



第2図 前田山遺跡9号石棺墓出土鏡（左）と原田遺跡1号箱式石棺墓出土鏡（右）

棺は長さ3mの割竹形木棺で、直径は約1mと想定されている。棺内には朱が敷かれ、特に西側から多く検出されている。玉類の配置と考え合わせると被葬者は西枕で葬られたと考えられる。

副葬品は棺内と墓壇内から多く出土している。ここでは、銅鏡の出土状況を概観する。銅鏡は超大型内行花纹鏡5面のほかに、内行花纹鏡2面、方格規矩鏡32面、鳧龍文鏡1面の総数40面確認され、墓壇の四隅と木棺中央部南側から出土している(A～E区)。そのうちA・B区は蜜柑植樹溝掘削時に攪乱を受けており(この植樹溝掘削が遺跡発見の発端となる)、遺物の出土状況等は明らかではない。しかし、A・B区から出土した超大型内行花纹鏡2面と内行花纹鏡2面は鏡片の欠損がほとんど無いことから、この4面については、完形鏡が副葬されていたとする考え方もある(柳田2000)。C・D区は方格規矩鏡を中心とする破砕された鏡が出土している。弥生時代後期になると銅鏡の複数面副葬が地域的に限られ、基本的に1面の銅鏡を破砕するが、平原1号墓では、完形副葬の可能性のある4面を除いた36面が破砕されており、この墳墓の特徴といえる(註1)。

また、銅鏡の出土状況から破砕行為は人数的に限られた人々が墓壇を取り囲んで行ったものと想定できる。このことから筆者は平原1号墓の葬送儀礼では墓壇という狭い空間を取り囲み、少人数で銅鏡を破砕する儀礼とともに、広い場所で大勢の人々が力を合わせて行う大柱の樹立という、二

種類の重層的な儀礼が執り行われたと考えている(平尾2006)註2。

IV 破鏡の様相

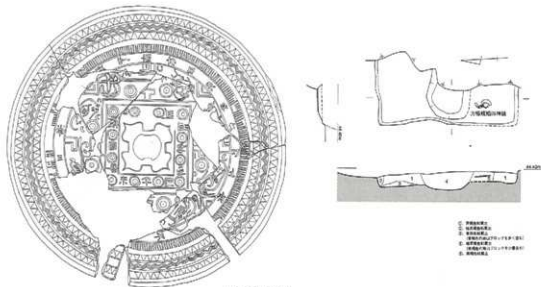
1. 北部九州の様相

破鏡は破砕鏡に比べ古くから認識されていたものである。破鏡という用語は梅原末治氏が用いたもので(梅原1952)、北部九州での鏡片副葬の認識は小田富士雄氏により示された(小田1959)。その後、調査事例の増加と共に①破鏡の出現、②破鏡の流通形態、③使用・廃棄のコンテキストという3つの問題意識(辻田2005a)のもとに研究が進められた(高倉1976・高橋1979・田崎1984・藤丸1993・森岡1994ほか)。以下、先学の研究成果に従いつつ、地域の様相をみていく。

破鏡は弥生時代後期からみられる。弥生時代後期～終末期にかけての分布の中心は北部九州にあり、各地域で異なる様相を示す。

福岡県内の破鏡は甕棺埋葬葬地域の周縁部に位置付けられる北九州・京築地域に分布の中心をもつ。この地域の破鏡は高島遺跡S1号石棺墓例(栗山編1987)や馬場山遺跡S5号石棺墓例(栗山編1980)のように墳墓から出土することが多い(藤丸1993)。墳墓以外の出土例としては、溝から出土した津留遺跡例(副島編1991)が認められるが、いずれも穿孔がないものが多い。

また、従来、完形鏡のみを副葬していた糸島地



第3図 井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓出土方格規矩鏡(左)と木棺墓実測図(右)(2/5・1/60)

域でも破鏡が見られるようになる。三雲遺跡イブ地区4号石棺墓の副葬品の可能性が高い内行花文鏡片（柳田・小池編1982）や井原ヤリミゾ遺跡1号木棺墓出土内行花文鏡片（江崎・植崎編2006）など墳墓出土例とともに、御本松原遺跡100号住居跡例（井上編1983）のような集落出土例も認められるが、いずれも穿孔はない。

一方、大分県（豊後地域）でも大分市や大野川流域に分布する破鏡は、高松遺跡16・36号住居跡例（坂本編1988）や原遺跡3号住居跡例（後藤他編1982）のように集落からの出土が大部分を占め、穿孔を持つものが多い特徴がある。このように同じ破鏡でも地域によって使われ方が大きく異なることがわかる（藤丸1993）。

また、本丸遺跡例は扇形の外区片で、両端に穿孔を施す（小倉1985）。破鏡は石蓋土壇墓の床面、被葬者の胸元付近から出土し、伴出した勾玉・菅玉とともに一連の首飾りとして被葬者に着装したものと考えられる。

古墳時代になると完形鏡の副葬が主流になるが（辻田2001）、北部九州では破鏡も見られる。羽根戸南古墳群G3号墓は古墳時代前期中頃の全長19.6mの前方後円墳である（米倉編2001）。その第一主体部である割竹形木棺から出土した内行花文鏡は1/2程度の大きさの破鏡の破断面を研磨し、2箇所に穿孔を施した後に破砕するもので高津尾例と同様な破鏡の破砕事例である。なお、破砕された銅鏡はまとめて布にくるまれた状態で出土した。

また、古墳時代前期後半に位置付けられる野間10号墳から出土した神人獣形鏡は鈕座～外区まで残る1/4期の破鏡である（賀川・小田1967）。この銅鏡は4つの孔をもつが、破鏡で穿孔を持つものは基本的に鈕を欠落したもので、藤崎遺跡例のように懸垂用の孔として用いられるため（濱石1991）、副葬される以前に割れた鏡片を結びつけるための穿孔とされる。本例は鈕を持つ破鏡で穿孔ももつ数少ない例とされるが、穿孔の目的が異なりひとくりでは扱えない資料であろう。

逆に破鏡ではないが、花野谷1号墳から三角縁神獸鏡と共に出土した連弧文銘帯鏡（踏み返し鏡）の可能性も指摘されている。森岡2005は、完形鏡であるが、鈕が破損しているため、懸垂用の穿孔を施す例である（福井市教育委員会2000）。

したがって、鏡の穿孔は①懸垂用、②補修用と用途別に検討する必要があり、鉾を持つ破鏡には基本的に穿孔は施さない（辻田2005a）。

古墳時代前期からみられる三角縁神獸鏡は完形で副葬する鏡であるが、老司古墳では破鏡となった三角縁神獸鏡が出土した（山口他編1989）。それは外区縁部の鏡片で、面径の2/5を残し、復元径は22.9cmを測る。破断面側には5つの穿孔があり、いずれも研磨および手すりで滑らかになっている（高倉1989）。その後、辻田淳一郎氏による詳細な観察の結果、5つの孔は懸垂用のものであること。垂直に欠損する外区縁部は穿孔によって直線的に折り取られたことが明らかとなった。このため、北部九州という破鏡の発祥地では、破鏡の風習が長く引き継がれ、本来、完形鏡で用いるべき三角縁神獸鏡も破鏡として用いられたと解釈されている（辻田2005a）。しかし、破鏡の形態は様々あるものの（森岡1994）、銅鏡が多く破砕された平原1号墓例や、完形鏡が割れた状態で出土した安湊宮山古墳1号鏡（鎌ヶ江編2000）のように、意図的でなくとも銅鏡が割れた場合、外区が扇形に残ることが多く、この形が破鏡の一形態として認識されていたことで、不定形の鏡片も老司古墳例のように扇形に形を整えたとも考えられる。

2. 瀬戸内以東の様相

北部九州以外の状況はどうであろうか。破鏡と破砕鏡を合わせてみていこう。

弥生時代の破鏡は北部九州に分布の中心を持つが、一部は瀬戸内以東まで広がる。その時期は一部弥生時代後期前半にさかのぼる例も報告されているが、大半は弥生時代終末期～古墳時代前期が中心で、事例も北部九州と比べ少ない。

中国・四国地方では大きく①山陰地域、②瀬戸内地域、③四国太平洋沿岸地域の3箇所に分布する。

山陰地域では妻木晩田遺跡松尾山地区45号住居跡、妻木山地区119号住居跡、松尾城地区11号住居跡から鏡片が出土している（松本他編2000）。時期はいずれも弥生時代後期後半である。中・四国地域の鏡片を検討した君嶋俊行氏は集住度が高く突出して高い集落、または交易の拠点とされる遺跡からの出土が多く、破鏡を入手しえた集団

の優位性を認めている(君嶋2006)。

そのほか、青木遺跡60号住居跡(鳥取県教育委員会1978)や青谷上寺地遺跡からも鏡片が出土しているが、いずれも集落から出土する。

瀬戸内地域では、弥生時代中期後半～後期前半の包含層から出土したとされる文京遺跡10次調査例を除き(宮本編1991)、弥生時代後期後半から破鏡がみられる。文京遺跡24次調査や庄・蔵本遺跡からは、弥生時代終末期～古墳時代初期の集落内の包含層から鏡片が出土している(中村編2005)。なお、両者はいずれも穿孔が施されている。

墳墓からの出土例は、集落出土例よりも若干、後出する。鶴尾神社4号墳は弥生時代終末期～古墳時代初期に位置付けられるが(渡部編1983)、この古墳から出土した方格規矩鏡は完形のものが約1/2ずつ二つに割れており、お互いをつなぎ合わせるための補修孔が施されている(梅原1933)。この鏡の副葬状況は盗掘の影響で明らかではないが、補修孔をもつ鏡の破砕例の可能性がある。

また、古墳時代初期に位置付けられる朝日谷2号墳の2面の銅鏡は完形のもを二つに分割して副葬している(梅本編1998)。このあたりは古墳時代前期の完形鏡副葬システムが確立される以前の副葬形態として注目される。

一方、破鏡を副葬する場合も多い。相の谷9号墓主体部の箱式石棺からは2孔をもつ破鏡が出土している(正岡1973)。また、一国山3号墳主体部の箱式石棺には破断面が滑らかな破鏡が副葬されており、一定期間の破鏡の使用が認められる(河田編2006)。石鏡山2号墳では第1主体部である組合式木棺北側小口隅で2孔をもつ約1/2の破鏡が破砕されていた(広島県教育委員会1981)。この例は、先述した羽根戸南古墳群例とよく似た副葬形態である。

四国太平洋沿岸地域では、類例が少ないながらも弥生時代後期前半～中頃から破鏡の出土が確認される^{ns}。田村遺跡は弥生時代前期から継続する大規模な集落遺跡であるが(出原他編1986)、弥生時代後期～終末期にかけての住居跡や自然流路、または水溜り状の遺構と考えられる遺構から方格規矩鏡の破鏡が出土している。このことは、山陰地域・瀬戸内地域と共通する点であるが、古墳時代初期～前期の出土例はほとんどない。また、

墳墓からの出土例も確認されていない。

近畿では弥生時代後期前半から破鏡が見られる。滝ヶ峯遺跡は高地性集落であるが(森1972)、その西端で確認された空堀状遺構から龍文鏡片が出土している^{as}。

播磨大中遺跡7-A号住居跡は弥生時代後期後半のベッド状遺構をもつ住居跡であるが(山本1990)、床面近くから破断面が摩滅し2孔をもつ内行花文鏡が出土した。このように、滝ヶ峯遺跡例を除くと、吉田南遺跡や芥川遺跡例のように大部分が弥生時代後期後半以降の集落からの出土である。また、瓜破北遺跡の弥生時代後期の遺物包含層からは異体字銘帯鏡片が出土している(京嶋1981)^{ms}。

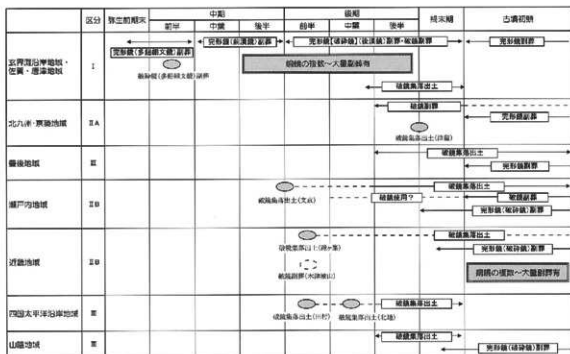
例外として木津城山遺跡方台状墓2の周辺埋葬施設SX09から帯鏡片が出土している。調査担当者はその時期を弥生時代後期前半とする(伊賀編1998)^{ms}。

しかし、弥生時代終末期からは墳墓への副葬例が増加する。ホケノ山墳丘墓は全長約80mの前方後円形の墳丘墓で、主体部は石積木櫓である。棺は割竹形木棺で、西文帯神獸鏡が1面副葬される。棺外からは内行花文鏡片など23点の銅鏡片が確認された。これらは、少量の出土でありながら接合する破片が多いことから、副葬段階で鏡片であったものが、さらに割れた可能性が指摘されている。また、出土状況から、これらの鏡片は石積木櫓の上で破砕された状態ではら撒かれた可能性もある(榎原考古学研究所編2001)。

また、黒田墳丘墓は全長52mの前方後円形の墳丘墓で、双頭龍文鏡が木棺内外から破砕された状態で出土した(岡部町教育委員会1991)。

弥生時代終末期～古墳時代前期にかけては東山古墳(仁保1992)や寺ノ段2号墳などの墳墓や池島・福万寺遺跡などの集落で、破鏡が一斉に副葬・廃棄されていく(辻田2001)。

古墳時代前期になると古墳へ副葬される銅鏡は完形鏡が主体となるが、一部で銅鏡の破砕が行われる。愛宕神社1号墳は4世紀後半に築かれた方墳で斜縁四獣鏡が出土した(竹井編1998)。主体部は長大な組合式木棺で、内部を北副室-主室-南副室の3つに区分する。銅鏡は被葬者の足元付近、つまり主室南東隅で破砕され、鏡片を積み重ねて仕切り板に立てかけられていた。本例は古



第4図 完形鏡・破砕鏡・破鏡の時的変遷図

墳時代の破砕鏡の事例であるとともに、銅鏡を被弾者の足元に副葬する数少ない事例でもある。

また、板井茶白山古墳では倭鏡の破鏡の存在が指摘されているが(今尾1993)、倭鏡の破鏡は類例に乏しい。

近畿以東では愛知県高藏遺跡で弥生時代後期前半の住居跡から破鏡が出土している。鏡式は龍鷹文鏡で滝ヶ峯遺跡例と共通する。それ以外では弥生時代後期後半~終末期が初現期である。また、破鏡の分布には地域的な粗密の差があり、石川県金沢市周辺では無量寺B遺跡(出越編1984)、古府クルビ遺跡(橋本編1976)、吉崎・次場遺跡(福島編1984)などで破鏡が出土し、一大密集地となっている(林2005)。

また、高部古墳群では破鏡・破砕鏡が見られる(小沢1998)。

古墳時代前期になると山形県の馬洗場B遺跡にまで破鏡が及ぶ事が確認されている(高橋2003)。なお、瀬戸内以東への破鏡・破砕鏡の広がり、小形仿製鏡の展開とも関連が認められる。近畿地域出土の北部九州製小形仿製鏡は10面ほど出土しているが、いずれも弥生時代後期後半以降の遺構から出土している(高倉1985)。

また、近畿製の小形仿製鏡は鈕と鈕孔が大きいという特徴があり(田尻2005)、最も古い例として青谷遺跡表採品が挙げられ、その文様から弥生時代後期前半に位置付けられている(森岡2005)。そしてこのモデルとなる小型の前漢鏡が後期初頭に持ち込まれたと想定されている(森岡1993)。

しかし、現段階では近畿で弥生時代後期初頭以前の遺構から前漢鏡が出土した事例はほとんど無く、時期が特定できる遺構からの出土が待たれる。さらに加えると、近畿では銅鏡の使われ方が北部九州とは異なるため、銅鏡自身の手経路も異なる可能性もある。

今まで述べてきた各地域の破砕鏡・破鏡の時の変遷をまとめたものが第4図である(図7)。

V 分析

以上、破砕鏡と破鏡の概要を見てきたが以下で若干の分析を行う。

1. 破砕鏡について

銅鏡の破砕は、現在のところ、弥生時代中期前半からはじまる(増田遺跡6242号裏棺蓋)。し

かし増田例は、後続する破砕事例が後期前半まで見られないことや報告書の記載などからも破砕鏡とは断言できない¹¹⁸。しかし、本例が破砕鏡だとすると、前述したとおり、ある場所（甕棺墓の近くかどうかは不明）で破砕したものを甕棺の中に納めたものといえる。

弥生時代中期には銅鏡の破砕が認められず、完形鏡を副葬する時期といえる。しかし、銅鏡を所有できる層は限られており、銅鏡の分布も限定的であった。

弥生時代後期前半になると破砕鏡が認められる。二塚山遺跡76号甕棺墓では甕棺口縁目張り粘土から破砕された異体字銘帯鏡が出土した。本例が破砕鏡の棺外副葬の初現で、以後、棺内副葬と併行しながら棺外副葬が定着していく。

また、弥生時代後期前半以降、甕棺墓から木棺墓・石棺墓へと墓制の変化が認められるが、銅鏡の破砕は継続される。なお、甕棺墓で銅鏡の破砕が行われる場合は、下葬に被害者を埋葬し、上葬で蓋をした後に銅鏡の破砕を行うことが多く、その場所としては甕棺の合口部に集中する（良積遺跡14号甕棺墓など）。

弥生時代後期後半～終末期に築かれた高津尾遺跡16区40号墓では、3/4程度の方格規矩鏡を破砕する。このような破鏡の破砕事例は少ないが、古墳時代前期まで継続してみられる。

また、墓壙中で鏡の破砕を行う井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓例は木棺を据え、ある程度埋めたところで銅鏡を破砕するという平原1号墓との共通点もあり、時期的な関係から平原1号墓でみられる銅鏡破砕の祖形的な事例として認められる可能性がある。しかし、例えば銅鏡を10面以上破砕するような、直接的系譜関係をもつ墳墓は未だ確認されていない。したがって、現段階では銅鏡を1面破砕する葬送儀礼から飛躍的に複雑化したものが平原1号墓の銅鏡破砕といえるだろう。また、仮に井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓における銅鏡の破砕が平原1号墓の祖形といえるならば、糸島地域という狭い範囲の中で銅鏡を用いる葬送儀礼が短期間で重層化したことになる。

従来、弥生時代において、ひとつの墳墓に複数面の破砕鏡が認められるのは平原1号墓のみであったが、近年調査された中原遺跡13415号方形周溝墓で2面の破砕鏡が出土し、注目される¹¹⁹。

瀬戸内以東でも弥生時代終末期以降、銅鏡の破砕行為が認められるが、弥生時代終末期のホケノ山墳丘墓や黒田墳丘墓の破砕事例の系譜が北部九州・瀬戸内のどちらに繋がるものなのか検討する必要があるだろう。

さて、平原1号墓で見られるような銅鏡の破砕行為は、その規模を縮小しながらも大型前方後円墳出現前後まで認められる（今尾1993）。また、北部九州では羽根戸南古墳群G3号墳や老司古墳など古墳時代前期にも継承されるが、古墳時代に入ると基本的に完形鏡を副葬するようになり、破砕鏡や破鏡の副葬は減少していく。

いうなれば、弥生時代後期後半～終末期にかけて完成もしくは最高潮を向かえた平原1号墓を頂点とした銅鏡を破砕する葬送儀礼は、古墳時代の墳墓祭祀の主流とはならなかったのである。しかしながら、平原1号墓で出土した超大型鏡の生産・副葬は古墳時代前期まで継承されるなど、破砕鏡を用いた葬送儀礼とは大きな違いを見せる¹²⁰。

2. 鏡の認識の時期的変遷

破鏡の生成には、様々な理由が挙げられている。例えば鏡片の輸入（森1985・高橋1979）や破砕鏡からの破片の取り出し、破片の切り取り（藤丸1993）など諸説あるが、未だ確定していない。鏡片の輸入の場合、原の辻遺跡に馬車の車軸頭等の中国製の青銅器が持ち込まれているので、可能性が無いとはいえないものの、中国には様々な青銅器がある中で、銅鏡の破片だけが選択されて大量に持ち込まれるとは少し考えにくい。

また、仮に鏡片の輸入が行われたとしたら、大陸に最も近い対馬で小形仿製鏡や広形銅矛が出土しながら、破鏡が全く認められないことは不自然であろう。一方、後者の場合も、接合例がほとんどない現状であるが、前田山遺跡や原田遺跡の事例から、可能性としては前者よりも高いといえる。

また、先述したように破鏡は豊前地域においては基本的に墳墓の副葬品として使われ、一方、豊後地域では集落から出土し、穿孔を持つものが多いなど、地域によって使われ方が異なり、その分布も明瞭に分かれる（藤丸1993）。このことは、人々の銅鏡に対する認識の差を示していると考えられる。以下でその変遷と地域性をたどってみよう。

北部九州では弥生時代前期末～中期前半にかけて、朝鮮半島製の多鈕細文鏡が認められる。国内で11遺跡12面出土しているが、そのうち8面が北部九州から出土し、甕に入れて埋納されていた若山遺跡例を除くほとんどが副葬品として扱われ、1面ずつ納められている。現在のところ、破砕鏡の可能性が指摘されるものは、増出遺跡例のみで、この時代は完形鏡の時代といえるが、今後、朝鮮半島の事例とともに破砕の有無の確認が必要となるだろう。

弥生時代中期後半になると、紀元前108年に朝鮮半島西北部に設置された楽浪郡を經由して持ち込まれた前漢鏡が見られるようになる。しかし、分布は山口を含む北部九州に限られる。しかも、後の伊都国・奴国の拠点となる遺跡で銅鏡が集中して副葬される。例えば、三雲南小路遺跡1号甕棺の副葬品を見てみると武器形青銅器やガラス製玉類やガラス盤、金銅四葉座飾金具のほか前漢鏡約35面が認められる(柳田編1985)。甕棺の大部分が破壊され、詳細は不明ながらも、記録や拓本、博多の聖福寺に納められている銅鏡から、これらの銅鏡は本来、完形で副葬されたと考えられる。須玖岡本遺跡でも同様に約30面の銅鏡が副葬されている(春日市教育委員会編1994)。また、立岩堀田遺跡10号甕棺では、6面の前漢鏡が出土しているが、被葬者の左右それぞれに3面ずつ配置している(立岩遺跡調査委員会編1977)。これら3遺跡以外では銅鏡はほとんど副葬されず、銅鏡が認められる場合でも1・2面のものが大半となる。これらはいずれも完形鏡で、前代に引き続き銅鏡を完形で用いる時代といえる。したがって、先述したように近畿地域で異体字銘符鏡の鏡片が包含層から出土する例が認められるが、いずれも小片であるため、後の時代に持ち込まれたものと判断する。

また、北部九州では銅鏡の多量副葬など独自のシステムで階層を明示しており、本来、化粧道具として用いられた中国とは銅鏡に対する思いや位置付けも異なるものと考えられる。ただ、この時代は基本的に完形鏡を用いるため、鏡背文様に含まれる意味を理解することも可能であったと判断しておきたい。

弥生時代後期になると銅鏡の分布は前段階に比べると大きく広がるが(特に後半段階)、銅鏡そ

のものは完形で用いられることが激減し、葬送儀礼の中で完形鏡(破鏡)が破砕されたり、破鏡が副葬されるようになる。破砕鏡・破鏡の時代の到来である。

銅鏡を破砕したり、破鏡が作られる理由として、需要の増加に対して、中国内部の情勢悪化のために供給量が減少したことによるという解釈があるが(田崎1984他)、実際のところはよく分からないのが実情である。

また、先述したように破鏡の分布には特色があり、用途も地域で異なる指摘されているが、その分布を見ていくといくつかに分類できる。

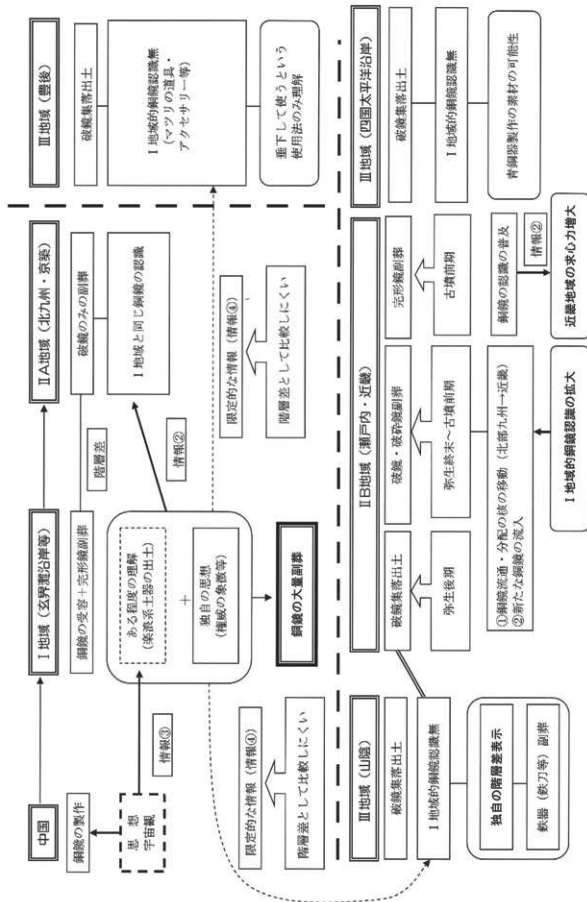
まず、弥生時代後期にも完形鏡を副葬し、破鏡も副葬品として扱われる場合が多い地域である。地域的には玄界灘沿岸(糸島・福岡)・佐賀・唐津地域が該当する(I地域)。

次に完形鏡の副葬がほとんど見られないが破鏡を墳墓に納める地域である(II地域)。地域的には北九州や京築などの豊前地域が該当する(IIA地域)。時間的には後出するが、弥生時代終末期～古墳時代初頭になると瀬戸内・近畿地域も破鏡を墳墓に納めることから、IIB地域として区分する。

3番目は完形鏡の副葬が認められず、破鏡も住居や溝など墳墓以外から出土する地域である。地域的には豊後地域・四国太平洋沿岸地域・山陰地域が該当する(III地域)。

I～III地域における銅鏡の性格を見てみよう。I地域は基本的に前代から完形鏡の副葬を継続する地域である。加えて、数を減少させながらも弥生時代後期まで完形鏡を副葬する地域であることから、完形鏡を保有する層、破鏡を保有する層、銅鏡を持っていない層それぞれの関係は階層差を示すといえる。また、地域内に完形鏡が存在し、銅鏡の有無や完形と破片の違いが階層差を示すとすれば、銅鏡の背に鋳出された文様の意味なども、完形鏡をもつ層のみならず破鏡だけをもつ層、銅鏡に触れることすら許されない層の人々にまで、ある程度理解が浸透していたと考えられる。

IIA地域の豊前地域では基本的に破鏡のみが出土する。その出土傾向はすでに指摘されているように、墳墓からの出土が大半で、集落からの出土は津留遺跡など少数にとどまる。なかには本丸遺跡のように管玉や勾玉とともにネックレスとして用いられることもある。この地域は弥生時代中期



第5図 西日本における銅鏡の認識模式図

～後期にかけて完形鏡の出土がほとんどなく、後期後半～終末期に破鏡が副葬されることから、I地域のように鏡背の意味まで理解したのか不明な点はあるが、前田山遺跡のように銅鏡の折り取り事例の存在や銅鏡は墳墓に納めるといふI地域の基本的なルールは守られていることから、完形鏡一破鏡という階層差を理解しながらも完形鏡を入手できなかった地域といえる。

III地域は集落から破鏡が出土する地域で、穿孔をもつものが多い。この地域では、小型鏡は吊り下げて使うという日常的な使用法は共通しながらも、銅鏡は最終的に墳墓に納めるといふルールは理解されていない。

また、銅鏡から破鏡を取り出す方法として銅鏡破後の鏡片取り出しや完形鏡からの折り取りが想定されるが、現在のところ、豊後地域では認められず、他地域から鏡片が持ち込まれたと考えるのが自然であろう^{註11}。したがって、鏡片の受け入れ側は銅鏡の全体像やその意味などは知る由も無かったものとする。

山陰地域^{註12}や四国太平洋沿岸地域^{註13}にも鏡片で持ち込まれたと考えられ、大きく捉えるならば豊後地域と同じような銅鏡の認識といえるだろう。

II B地域とした瀬戸内地域、とくに四国瀬戸内側では弥生後期後半段階では集落からの鏡片出土が散見される。しかし、弥生時代終末期～古墳時代初頭になると瀬戸内地域で一斉に破鏡が墳墓に副葬される。これは、辻田氏が指摘するように弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて新たに大陸からの銅鏡の流入が想定されるとともに、墳墓への銅鏡副葬、つまり北部九州的な銅鏡の使用法が東方に拡大したものと考えられる。

古墳時代前期になると多くの研究者が指摘するように、完形鏡副葬の時代となり、銅鏡の分布などから銅鏡流通・分配の核が北部九州から近畿へと完全に移行したといえる(辻田2001)。

VI まとめ

本稿では、破砕鏡・破鏡の出土形態と出土する遺構の違いから銅鏡に込められた意味と弥生時代の人々の関係について検討を行った。

近年、弥生時代終末期～古墳時代前期に神仙思想が取り入れられて云々・・・という議論が盛んであるが、これらは基本的に完形鏡の鏡背を見な

いと理解できないものであり、その前段階の銅鏡の認識はどのようなものであったのかという素朴な疑問が本稿をまとめる契機となった。

結果として、中国で鑄造された時に鏡背の文様に込められた思いや宇宙観が、北部九州に持ち込まれた段階でも共通するものかどうかは不明であるが、本稿のI地域やII A地域では銅鏡に対する一定の共通した認識が存在したと考えられ、同じ銅鏡でも集落でのみ破鏡が出土するIII地域とでは、銅鏡に対する認識が全く異なっていた可能性を指摘した。

また、II B地域は当初、集落からの出土のみであったが、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて墳墓の副葬品として銅鏡が用いられ始める。これは前述したように銅鏡の流通・分配の核の移動に伴うものと考えられており、瀬戸内海を介して銅鏡副葬の風習が東方に伝えられたのであろう。このことは、さまざまな搬入ルートが想定される鉄器や鉄素材とは全く異なる点である。

なお、本稿では銅鏡の使用形態の違いが銅鏡に対する認識の違いであると指摘したが、鉄の加工技術やガラス玉の製作技術などの情報は、愛媛県文京遺跡などの大型拠点集落に伝わっている。そこには北部九州との頻繁な交流が想定され、さまざまな情報も伝わったものと考えられる。しかし、すべての情報が同じように流れるわけではなく、例えば

- 情報① 自然と伝わっていく情報
- 情報② 積極的に外に出していく情報
- 情報③ 要望があれば提供する情報
- 情報④ 外に出さない情報

などのように情報のあつかいはそれぞれ異なる。

本稿で検討した銅鏡を通じて考えてみると、中国で銅鏡の製作時に込められた思想や宇宙観は、楽浪系土器の存在などからI地域ではある程度理解されていたと考えられる(中国・楽浪部からの情報③)。I地域ではこれに加えて、銅鏡の保有を権威の象徴とするなど、独自の思想を付加した結果、弥生時代中期後半には銅鏡の大量副葬が見られるようになる(三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡)。II A地域は破鏡のみであるが銅鏡を副葬することから、I地域と同様な銅鏡に対する認識であったといえる(I地域からの情報②)。つまり、I地域・II A地域では完形鏡一破鏡副葬の差は階

層差といえる。

しかし、銅鏡の墳墓副葬は北部九州以外では弥生時代終末期までほとんど認められないことから、銅鏡の最終的な使用法、つまり葬送儀礼に伴う銅鏡の使用法は外に出さない情報のひとつになっていた可能性がある（情報④）^{a14}。

ただ、Ⅲ地域では、集落出土でありながらも、破鏡に穿孔を施したり、鈕を伴う破鏡には穿孔を施さない特徴を持つことから、小型の銅鏡は吊り下げて用いるという銅鏡の日常的な使用法は理解されていたと考えられる（辻田2005a）。

当初、Ⅲ地域と同様な銅鏡の出土傾向を示していたⅡB地域は、弥生時代終末期～古墳時代初頭になると破砕鏡・破鏡を墳墓に副葬するようになる。その原因として、北部九州から近畿への銅鏡流通・分配の核の移動や、新たな銅鏡の流入が考えられ（辻田2001）、その結果、Ⅰ地域（ⅡA地域）でみられた銅鏡の認識がⅡB地域まで拡大したのである。

古墳時代がはじまるとⅡB地域（特に近畿）は弥生時代のⅠ地域とは異なり、銅鏡の価値や意義を広く西日本全域に知らしめることで（ⅡB地域からの情報②）、従来、銅鏡を受容していなかった地域にも、銅鏡の認識が広がり、より一層近畿の求心力・権威が高まったと考えられる。

つまり、この銅鏡認識に関する情報の取り扱いの差こそ、弥生時代の北部九州と古墳時代の近畿の最も大きな差であったといえる。なお、この段階で、銅鏡には弥生時代のⅠ地域的銅鏡認識に、古墳時代前期のⅡB地域的銅鏡認識が加味されたと考えられる。

上で述べた関係を模式的に示したものが第5図である。

このように、弥生時代における銅鏡の認識や用い方は地域によって大きな差があることが明らかとなったが、これらの比較・検討やその解釈、また銅鏡以外に認識の差を持つ遺物の確認などが今後の課題となるだろう。

本稿は平成18年度秋季特別展「大鏡が映した世界」の図録の原稿を執筆する際に気になったところをまとめたものである。また、本稿の内容は第13回福岡大学金属器談話会で発表した内容の一部を含んでいる。

しかしながら、本稿では各地域の破鏡の取り扱いが雑駁なところもあり、今後、資料調査の継続を考えている。先学諸賢のご叱正を請う次第である。

なお、本稿の執筆にあたり、下記の方々にご教示を受けた。記して感謝申し上げます。

小田富士雄・小松 譲・武末純一・田尻義了・辻田淳一郎・寺沢 薫・西谷 正・藤丸詔八郎・村上久和・桃崎祐輔（敬称略 五十音順）

（註）

1. 平原1号墓出土鏡には、ほぼ成形に復元される一群と、欠損部分が多い一群があるが、後者の欠損部分の行方の確認とその意義付けが課題である。
2. 筆者は鏡の破砕には、被葬者の後継者や集落の有力者などが参加したと考える。反対に大柱の樹立には、被葬者（王）を慕う一般の人々が参加したと考える。
3. 北地道跡の隅丸方形の住居跡から破鏡が出土している。住居跡出土の土器から弥生時代後期中頃とされる（出原2004）。また、田村遺跡群2次E1区102号住居跡からも破鏡が出土し、弥生時代後期前半に位置付けられる（小野他編2004）。
4. 滝ヶ峯例の存在は「IV期末～V期初頭の弥生土器にみられる瀬戸内地方との広域交流に乗じた現象」という解釈もある（森岡1993）。
5. これら異体字銘帯鏡の出土から弥生時代中後半～後期初頭の段階に前漢鏡の流入を指摘する意見もあるが（森岡1993）、この段階に銅鏡として流入したならば、成形に近い形で存在すると考えられるため、これら小片の場合は、より新しい時期に流入したものと考える。
6. 出土状況は概報によると「（方形台状墓2の）方台部西寄りのSX08・09については、検出面が西に向かって次第に傾斜していることもあって、依存状態は良好とは言えないが、墓塚とともに長方形プランで、長さ3.0m前後・幅1.0m前後の規模を有する。両者とも完掘していないが、その西半部を南北方向に貫く墓塚より新しい溝（SD15）の掘削に伴い、その下縁が一部墓塚底（棺底）に達し、SX09と重複する部分で獣帯鏡破片が1点出土した。」とあり、検出状況の図等は掲載されていない（伊賀編1998）。調査担当者はSX09に伴うものと判断されているが、近畿では破鏡を伴う弥生時代の層はほかに認められず、概報を読む限りSD15出土の可能性も否定できないため、資料

の取扱いが難しい。報告書の段階で遺構図や上層断面図が掲載されることを期待したい。

7. この変遷図は以前、発表で提示した際、田尻義了氏より、①小形仿製鏡との比較が必要ではないか、②玄界灘沿岸・佐賀・唐津地域という地域区分はもう少し細かく区分できるのではとの指摘を受けた。

②については同じ完形鏡を副葬する1地域のなかでも、1面のみ副葬する地域、多量に副葬する地域などのように小地域区分が可能であるが、本稿では、西日本全域における銅鏡の認識の違いを検討するために比較的大きな地域区分としている。また、①については本稿では若干ふれるのみで、大きく反映することができなかった。今後の課題としておきたい。

8. 報告書には「鏡は細かく割れ、ほとんどが鏡面を上に向けた状態でA層底の直上より出土した。棺内には陥没による崩落土が充填していたが、鏡片は散在しており（流入土により割れたとしたら）やや不自然な出土状況である。さらに出土した鏡は完形ではなかったため、遺体の傍らに割れた（故意に割られた？）状態で副葬された可能性がある。ただし鏡片が調査時に失われた可能性もあり、埋没していく過程で割れてしまったことも否定できない。」とある。また、本例が破砕鏡だとしても、多細頸文鏡と透鏡ではその意味合いが異なるものとする。また、多細頸文鏡の破砕については、朝鮮半島における事例の有無の確認も必要である。

9. 中原遺跡については、小松謙氏にご教示を得た。また、遺跡の概要は第8回七隈史学会で発表されている。本稿では中原遺跡で破砕鏡が複数面出土したことのみに記し、その性格等については報告書の刊行後検討してみた。

10. 葬送儀礼の中で、完形で用いる鏡、破砕する鏡が区別され（小山田2005）、古墳時代になると前者が後者を圧倒していったのであろう。また、弥生時代後期の小形仿製鏡から古墳時代の透鏡へいたる銅鏡の製作技術の飛躍的向上（継続性の有無は別として）も大きな変化点である。

11. 豊後地域の場合には墳墓の調査例がほとんどないことも原因と考えられる。藤丸詔八郎氏にご教示。

12. 山陰地域では銅鏡ではなく、墳墓に納められた鉄刀などの鉄器の有無等で階層差を表現した可能性がある（野高2005他）。

13. 西国太平洋沿岸地域、特に西分増井遺跡では、破鏡だけでなく中広銅矛・広形銅文などの武器形祭器や

銅鐔の破片も出土しており、青銅器生産のための素材として持ち込まれた可能性が指摘されている（出原2004）。しかし、現在のところ銅型や取型は出土しておらず実態は不明であるが、実際に青銅器生産のための素材として破鏡（鏡片）が取り扱われたのならば、北部九州との交流が存在するこの地域でも、北部九州的な銅鏡の認識は無いものと考えられる。

14. 辻田氏は瀬戸内地域の破鏡の展開について、弥生時代後期に未穿孔破鏡が集落に廃棄され、古墳時代に穿孔を有する破鏡が多く副葬されることを指摘した。このことから、弥生時代の祭祀で継続的に用いていた破鏡が、完形鏡の流入とともに副葬されるようになったと判断している（辻田2005a）。

【参考文献】

- 伊賀高弘編 1998 『木津城山遺跡』『京都府遺跡調査概報』85（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊都国歴史博物館 2006 『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館図録3
井上裕弘編 1983 『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集
今尾文昭 1993 『古墳と鏡』『季刊考古学』43
雄山閣出版
岩永省三 1998 『青銅器祭祀の終焉』『日本の信仰遺跡』雄山閣出版
上野祥史 2004 『韓半島南部出土鏡について』『国立歴史民俗博物館研究報告』110
梅木謙一編 1998 『朝日谷2号墳』松山市文化財調査報告書第63集
柳原末治 1933 『讃岐高松石清尾山石塚の研究』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第12冊
梅原末治 1952 『岡山縣下の古墳発見の古鏡』『古備考古』85
江崎靖隆・嶋崎真子編 2006 『三雲・井原遺跡』前原市文化財調査報告書第92集
小倉正五 1985 『宇佐市本丸遺跡出土の副葬品』『えとのす』
小沢洋 1998 『千葉県高部30号墳・32号墳』『季刊考古学』65 雄山閣出版
小田富士雄 1959 『豊前京都郡発見の三重墓』『古代学研究』20
小野由香・出原惠三・名木郁・前田光雄・宮地啓介・吉成承三編 2004 『田村遺跡群Ⅱ 第3分画 D・E区』高知県埋蔵文化財センター発掘調査

報告書85

- 賀川光夫 1992「再生鏡の分配と弥生後期の社会」『史学論叢』22
- 賀川光夫・小田富士雄 1967「野間古墳群緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告』第13輯
- 春日市教育委員会編 1994「奴国の首都 須玖岡本遺跡」吉川弘文館
- 鐘ヶ江一朗編 2000「安濃宮山古墳」高槻市文化財調査報告書第21冊
- 河田健司編 2006「南坂8号墳 一国山城跡 一国山古墳群」岡山市教育委員会
- 君嶋俊行 2006「妻木晩田遺跡出土の破鏡について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2005』
- 京崎覚 1981「瓜破北遺跡出土の前漢鏡片」『考古学雑誌』67-2
- 栗山伸司編 1980「馬場山遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告書第36集
- 栗山伸司編 1987「高島遺跡調査概報」北九州市文化財調査報告書第45集
- 後藤一重他編 1982「原遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』大分県教育委員会
- 小山田宏一 1992「破砕鏡と鏡背重視の鏡」『弥生文化博物館研究報告』1
- 小山田宏一 2005「紀年銘鏡と古墳」『季刊考古学』90 雄山閣出版
- 坂本嘉弘編 1988「大分県大野郡犬飼町大寒所在遺跡の調査報告書」犬飼町教育委員会
- 柴尾俊介編 1991「高津尾遺跡4」北九州市埋蔵文化財調査報告書第102集
- 仁保晋作 1992「阿山町東山古墳の遺構と遺物」『研究紀要』1 三重県埋蔵文化財センター
- 副島邦弘編 1991「津留遺跡」行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集 福岡県教育委員会
- 園部町教育委員会 1991「船阪・黒田工業団地予定地内遺跡発掘調査概報」園部町文化財調査報告書第8集
- 高島忠平・七田忠昭編 1979「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第47集
- 高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58-3
- 高倉洋彰 1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2
- 高倉洋彰 1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』70-3

- 高倉洋彰 1987「割られた鏡」MUSEUM KYUSUJU 21
- 高倉洋彰 1989「銅鏡」『茗司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集
- 高橋徹 1979「廃棄された鏡片一豊後における弥生時代の終焉」『古文化談叢』6
- 高橋徹 1989「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60
- 高橋徹 1989「弥生墳墓と副葬品」『考古学ジャーナル』308 ニューサイエンス社
- 高橋徹 2005「鏡片分布から見た古墳出現期の動態」『馬洗場B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第123集
- 竹井治雄編「愛宕神社古墳」『京都府遺跡調査概報』83 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 武末純一 1990「墓の青銅器、マツリ青銅器—弥生時代九州例の形式化—」『古文化談叢』22
- 田崎博之 1984「北部九州における弥生時代終末前後の鏡について」『史淵』121
- 田崎博之 2006「四国・瀬戸内における弥生集落—愛媛県文京遺跡の密集型大規模集落、北部九州との比較—」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』
- 田尻義了 2001「弥生時代青銅器生産における生産体制論」『九州考古学』76
- 田尻義了 2003「弥生時代小形仿製鏡の製作地—初期小形仿製鏡の検討—」『青丘学術論集』22
- 田尻義了 2004「弥生時代小形仿製鏡の生産体制論」『日本考古学』18
- 田尻義了 2005「近畿における弥生時代小形仿製鏡の生産」『東アジアと日本—交流と変容』2 九州大学
- 立岩遺蹟調査委員会編 1977「立岩遺蹟」
- 辻田淳一郎 2001「古墳時代開始期における中国鏡流通形態とその曲期」『古文化談叢』46
- 辻田淳一郎 2005a「破鏡の伝世と副葬—穿孔事例の観察から—」『史淵』142
- 辻田淳一郎 2005b「破鏡と完形鏡」『東アジアにおける鏡祭祀の源流とその展開』関西学院大学21世紀COEプログラム 考古学・神道シンポジウム予稿集
- 辻田淳一郎 2006「威信財システムの成2・変容とアイデンティティ」『東アジア古代国家論』すいれん舎
- 出越茂和編 1984「金沢市額谷ドウシダ遺跡 金市無量寺B遺跡II」金沢市文化財紀要第44集

- 出原恵三他編 1986『田村遺跡』高知県教育委員会
- 出原恵三 2004『青銅器』『西分増井遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
- 寺沢薫 1985『弥生時代船載製品の東方流入』『考古学』と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ
- 鳥取県教育委員会 1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 中村豊編 2005『庄（庄・蔵本）遺跡』
- 長嶺正秀編 1987『廣田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集
- 奈良県立福原考古学研究所編 2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社
- 西川寿勝 1995『弥生時代終末の対外交流—破鏡の終焉をめぐる—』『研究紀要』3（財）大阪府埋蔵文化財協会
- 西田巖編 2000『増田遺跡Ⅳ』佐賀市文化財調査報告書第111集
- 野島水 2005『初期前方後円墳と鉄刀』『季刊考古学』90 雄山閣出版
- 橋本澄夫編 1976『古府クルビ遺跡』『北陸自動車道関係文化財調査報告書Ⅱ』石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団・石川県教育委員会
- 濱石哲也 1991『福岡市早良区藤崎遺跡出土の小形仿製鏡』『福岡考古』15
- 林正憲 2005『小形倭鏡の系譜と社会的意義』『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』
- 平尾和久 2006『引き継がれる銅鏡祭祀』『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館図録3
- 広島県教育委員会 1981『石鏡山古墳群』
- 藤丸詔八郎 1993『破鏡の出現に関する一考察—北都九州を中心にして—』『古文化談叢』30(上)
- 福井市教育委員会 2000『花野谷1号墳発掘調査概報』
- 福島日出海編 1987『嘉穂地区遺跡群Ⅳ』嘉穂町文化財調査報告書第7集
- 福島正美編 1984『吉崎・次場遺跡』
- 本出岳秋編 1998『良積遺跡Ⅱ』北野町文化財調査報告書第11集
- 正岡睦夫 1973『愛媛県今治市近見相の谷9号墓』『古代学研究』67
- 松本哲他編 2000『妻木戦田遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集
- 瀧口孝司 2000『墓地と埋葬行為の変遷—古墳時代の開始の社会的背景の理解のために—』『古墳時代像を見なおす』青木書店
- 宮本一夫編 1991『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 森浩一 1972『滝ヶ峯遺跡予備調査の記録』『滝ヶ峯遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会
- 森貞次郎 1985『弥生時代の東アジアと日本』『銅と青銅と鉄』日本書籍
- 森岡秀人 1993『近畿における鏡の受容』『季刊考古学』43 雄山閣出版
- 森岡秀人 1994『鏡片の東伝と弥生時代の終焉』『倭人と鏡—日本出土銅鏡の諸問題—』第35回埋蔵文化財研究会発表要旨集
- 森岡秀人 2005『銅鏡研究の動向と庄内式前後の日本列島事情（上）』『考古学論集』6
- 森岡秀人 2006『三世紀の鏡—ツクシとヤマト—』『邪馬台国時代のツクシとヤマト』学生社
- 柳田康雄編 1985『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
- 柳田康雄 2000『平原1号墓』『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
- 柳田康雄 2002『踏返し鏡と厚成鏡』『九州歴史資料館研究論集』27
- 柳田康雄 2005『多銀鏡と漢式鏡の祭祀』『日本列島における祭祀の源流を求めて』國學院大學21世紀COEプログラム 国際シンポジウム
- 柳田康雄・小池史智編 1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集
- 山口謙治・吉留秀敏・渡辺芳郎編 1989『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集
- 山野洋一編 1982『阿志岐古墳群』筑紫野市文化財調査報告書第7集
- 山本三郎 1990『播磨大中遺跡の研究』
- 吉田広 2006『四国・瀬戸内地域の集落出土青銅器』『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』
- 米倉秀紀編 2001『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第681集
- 渡部明夫編 1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会

【図の出典】

- 第1図 西田巖2000を改変
 第2図 伊都国歴史博物館2006を改変
 第3図 江崎・橋崎編2006を改変
 第4・5図 筆者作成

国内出土の蝙蝠座鈕内行花文鏡についての一考察

～福岡県前原市潤地頭給遺跡出土鏡を中心として～

江野道和（伊都国歴史博物館）

I はじめに

前原市教育委員会が平成14・15年度に実施した潤地頭給遺跡の調査では蝙蝠座鈕をもつ内行花文鏡が発見された。出土遺構および時期については擾乱を受けており、詳しい全体像に迫ることが困難であったものの、割竹形または舟形などの例抜式の木棺を主体部にもつ墓である可能性が考えられた。また、鏡の出土状態は、ばらばらに割れて散乱していたため、故意に破砕が行われた可能性も考えられた。

このような蝙蝠座鈕をもつ鏡の出土はかつての伊都国の領域内に焦点を絞ると、三雲寺口遺跡例に次いで2例目であったが、銘文・圓帯などの細部については相違点も見られた。

本稿では、潤地頭給遺跡出土鏡を同種の鏡と比較することによって、この位置付けを考えることとし、まず今回は、国内のものに絞って見て行きたい。

II 研究略史

ここでは蝙蝠座鈕をもつ鏡の研究史の概略を過去にさかのぼって見て行きたい。

まず、蝙蝠座鈕が認識される以前の状況を見ていくと、基礎となる鈕座の研究については三宅米吉氏¹⁾や高橋健自氏²⁾の論考がある。このうち後者の高橋氏は鈕座を分類する中で、四葉座を2種類に分類するなど、後の研究の素地を作ったといえる。

この高橋氏の論考が発表された後、香川県高松市に所在する猫塚古墳からの鏡の出土を契機として、研究は新たな段階に入ったといえる。各論考において、蝙蝠座鈕の様式論や時期論が交わされることとなるのも、これ以後である。しかしながら、いわゆる「蝙蝠座鈕」という名称についてはまだ固定化しておらず、特に、古い論考ではもっぱら「変形鈕座」として紹介されており、四葉座鈕の中の特異な形態としての捉え方が強い。また、これと併行して、補助的に「蝙蝠形」・「蝙蝠様」・「蝙蝠状」などの用語も使われる。

また、この頃には蝙蝠座鈕の型的な位置付け

を巡って、議論が交わされるようになる。議論の焦点は主に発生論に係わるもので、四葉座鈕からの変化を考える説と清白鏡などの連珠文座から発展したと考える説の2つがある。これらの説について、前者は主に富岡謙蔵氏³⁾・矢島恭介氏⁴⁾が唱え、後者は中山平次郎氏⁵⁾が採る。また、後藤守一氏⁶⁾は基本的に前者の説に沿うが、実際は両者が並存または順序が逆転しているものがあるという指摘を行っている。なお、蝙蝠座鈕の終焉としては、雙風鏡や楸首鏡の糸巻き方に変化するとの見方がほぼ定説化する。

ここまで取上げた議論から一歩進んだ形態分類を試みたのが梅原未治氏⁷⁾である。その方法とは蝙蝠座鈕を含む内行花文鏡を分類する上で、鈕座と連弧文帯の間にある圓帯⁸⁾や連弧文間に配される単位文様に注目するもので、圓帯のある大型品、同じく圓帯があり単位文様⁹⁾もあるもの、両方ともない簡単なもの3つに分類する。このような、圓帯や単位文様などの要素を抽出する方法は、今日の分析においても普遍的に行われている作業の一つであり、この梅原氏の論考をもって、研究は現在に近い新たな段階に入ったといえる。

これに続く、樋口隆康氏は先学の学説をまともにとともに、これをさらに発展させた詳細な分類を試みている¹⁰⁾。注目したのは、鈕座・外帯・中帯の3つの要素で、それぞれについて、A～C、a～c、ア～エに分類し、蝙蝠座鈕をもつものについては、鈕座をB、外帯は櫛目文をもつbまたは素文のc、中帯は平頂素圓のイと圓帯なしのエとした。

また、立木修氏は、高橋健自氏の分類¹¹⁾を基礎として、蝙蝠座鈕などの凹帯をもつ鏡の型式を付け加えた¹²⁾。具体的には高橋氏が行ったI～IVの型式にV～VIIの分類を新たに付け加えたもので、VI式を蝙蝠座鈕で無文の凹帯をもつもの。VII式を蝙蝠座鈕または四葉座鈕をもつものうち、雲雷文の渦文・同心円文が簡略化されたものとした。そして、時期的な変遷は最後のVIII式のみを外し、単純にI式からVI式まで順次に変遷すると考えた。

また、近年、岡村秀典氏は圓帯の有無による簡

易な分類を確立し、圓帯をもつものをⅠ式、圓帯をもたないものをⅡ式とし、時期的には、Ⅰ式を古式として位置付け、Ⅱ式への変遷を考えた²¹³。

Ⅲ 国内における鏡の分布

全体的な分布状況（第1図）を見ると、南は宮崎県から東は群馬県までの広範囲から出土していることがわかる。しかしながら、分布の密度を見てみると北部九州の中でも圧倒的に福岡県内の出土事例が多く、全体の約半数が集中する。

また、岡村氏のいうⅠ式とⅡ式の分布状況を見ると、福岡県内は両者が混在しており、東へ行くにしたがって、例外を除き、Ⅰ式が多い傾向にある。



第1図 銅鏡座鈕（内行花文）鏡出土遺跡分布図

Ⅳ 型式分類

本論における銅鏡座鈕の形式分類は、岡村氏の分類が現在の研究上広く使われていることに鑑み、これを基とした上で、さらに細分化を試みたい。

具体的には、岡村分類のとおり、圓帯のあるものをⅠ式、ないものをⅡ式とし、これを銅鏡座鈕の形態や圓帯、連弧文間の単位文様などの要素にしたがって5つに細分化する（第2図）。

まず、Ⅰ式についてはa～dまでの4つに細分する。aは銅鏡座の先端が短く、未発達で圓帯にまで達しないもの。bは銅鏡座の先端が伸び、圓帯と先端が接するもの。cは先端が圓帯を突き抜けて円文などの連弧文間に配された単位文様と一体となったもの。dは圓帯の幅が狭くなったものや縁帯となったものとする。

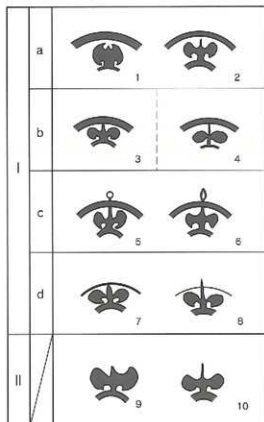
続く、Ⅱ式については先端の長短によって分類が可能であると考えるが、この方法では主観的な方法となりがちなことから、ここでは分類を行わないこととする。

それでは、以下に例を挙げながら見ていこう。

Ⅰ-a式 福岡県御笠地区遺跡（7）や同県谷頭遺跡（12）などが挙げられる。このうち、谷頭遺跡出土の鏡は、先端の突出が極めて短く（第2図-1）、同じ型式に位置付けた御笠地区遺跡出土のもの（第2図-2）と形態が大きく異なる。これが、時期的な要因によるものか、他の理由によるものなのかは、今後の検討が必要である。

Ⅰ-b式 分類を行った中で、最も数量が多い。特徴としては、Ⅰ-a式と比べ、面径が大きくなる傾向にあり（第3図）、銘文をもつものの割合が高いという点が挙げられる。

この型式の文様を詳しく見ていくと、大きく3つに分けられ、連弧文の間に銘文を配するものと、円形の単位文様を配するもの、両方を配するものなどが含まれることが分かる。このうち、銘文を



第2図 銅鏡座鈕の分類図

配するものについては、福岡県久原遺跡Ⅲ-4号墳出土鏡(9)、宮崎県伝広島古墳群出土鏡(16)などが挙げられ、いずれも「山」や「金」など左右が対称な文字の中軸線と蠅頭座の尖端のラインが揃う。また、円文を配するものについても、蠅頭座の尖端を意識した配置が成されており、なかでも京都府今林古墳群出土のもの(30)は単位文様が圓帯に接する部分があり、次の段階のⅠ-c式への過渡期に当たると考えられる。

なお、福岡県老司古墳出土鏡(4)と次のⅠ-c式に属する京都府美濃山出土鏡(29)については、鈕座の形態がいわゆる双葉状になっており(第2図-4)、連弧文帯と鏡縁の間に凹帯ではなく、櫛歯文や同心円を巡らすという点で特異な形態をとる。しかし、鈕座と単位文様のそれぞれの中心線が揃うという共通点も見られる。

Ⅰ-c式 この型式については、梅原氏が指摘しており¹⁴、古くから知られていた。香川県鼎塚古墳(19)、鳥取県伝倉吉市上神(24)などの例が挙げられ、このうち、前者の単位文様は円形であり、後者の文様はやや変形した涙滴形となる。前出のⅠ-b式では円形の単位文様が用いられていることから、円形の方が先行し、涙滴形に近い方は鈕座との一体感が強まった一歩進んだ形態の可能性がある。面径としては、前出のⅠ-b式とほぼ同じか、心もち大きなものが出現する(第3図)。

Ⅰ-d式 樋口氏の分類にない形態で¹⁵、兵庫県白鷺山(25)や潤地頭給遺跡出土鏡(7)などが挙げられる。このうち、潤地頭給出土鏡は連弧間の文様がなく、先端は長く延び、線画を突き抜けている。面径は小型化しており、Ⅱ式への連続性が見られる。

Ⅱ式 普遍的な要素を抽出できなかつたので細分化していないが、大まかに蠅頭座鈕の尖端が長いタイプと短いタイプとがある。前者は福岡県前田山遺跡(14)、山口県朝田墳墓群(20)、島

根県岡田山1号墳(22)などからの出土鏡が挙げられ、こちらがほとんどを占める。また、後者の短いタイプは静岡県鏡子塚10号墳出土鏡(32)がある。

前出のⅠ-d式の潤地頭給遺跡出土鏡と鈕座の形態についての連続性が見られるのは前者の先端の長いタイプである。また、面径については、小型のものが多い傾向にある(第3図)。

V おわりに

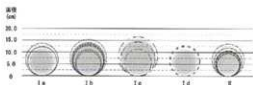
ここでは型式の変遷と潤地頭給出土鏡の位置付けについて考え、簡単なまとめとしたい。

まず、時期的な変遷については、研究略史で述べたとおり、大まかには岡村氏のいう圓帯をもつⅠ式を古式とし、圓帯を省略したⅡ式への変化を考えてよいものと思われる。それではこのたび細分化したaからdまでの4つの段階がどのような関係になるのであろうか。順序が前後するが、まずbとcとの関係を見ていくと、bの段階では鈕座の尖端に円文が配置されるもの以外に銘文が配置されるものがあり、未だ、形態が定まっていない。これと比べ、cの段階では若干の例外を除いて、ほとんどが単位文様と鈕座が一体となったデザインとなる。このことからb→cの流れが捉えられる。なお、cの段階で、伝倉吉例のように円文が涙滴形状に変形しているものは円文よりも新式に位置付けられる可能性がある。

そして、残るaについては、出土例が少ないため確証はないものの、bより若干古い段階、dの地頭給についてはcとⅡ式の変換期に位置するものと考えられる。なお、同じくd段階の白鷺山例については、圓帯が線状に細くなっているものの鈕座の形態はaまたはbの段階にあるため、一概にcの新段階に位置付けるのは困難であり、さらに一層の検討が必要である。

最後に潤地頭給遺跡出土例の位置付けについては、圓帯が線画となる、これまであまり知られていなかった例であること、形態がⅡ式で多く見られる先端の細長いタイプであることなどの要因から、この同型式のちょうど過渡期にある貴重な発見であると考えられる。

今回は、日本国内における事例を中心に検討したが、次回は中国や楽浪付近などの事例を加えてみたい。

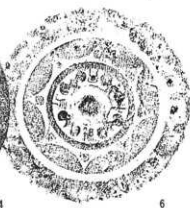
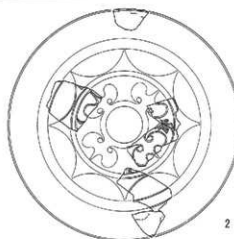


第3図 型式ごとの面径の比較



I-a

I-b



第4図 螺螄座鈕内行花文鏡1



19



24

I - c



29

I - d



25



1

II



3



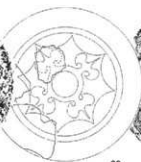
5



14



17



20



22



32

第5圖 銅鍍座鈕內行花文鏡2

国内出土の蠟座鈕(内行花文)鏡一覽

No.	通称・通称名	発祥時期	所在地	鏡径 (cm)	銘文	状態	形式	文庫	備考
1	福岡県遠賀郡 水部墓	—	福岡県遠賀郡	10.3	福岡県遠賀郡(第二)	鏡背?	銅座鈕 I d	1	
2	三河守石部跡 2号石室墓	弥生終末	福岡県直方郡	10.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	2-4b	
3	野方中尾跡跡 3号石室墓	古墳前期	福岡県直方郡	10.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	2-4b	上車山出土。
4	志保古墳 3号石室	古墳中期	福岡県直方郡	12.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	4-9	御田文倉行方。
5	土上原平塚古墳 大型環式石室	古墳中期	福岡県直方郡	13.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	5-6-4b	御田文倉行方。
6	新原 2号墳	古墳中期	福岡県直方郡	11.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	7-4b	行方出土。
7	新原跡(大塚跡) F70トレンチ3号室A	弥生終末	福岡県直方郡	13.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1a	8-9	鏡背銘文および銅座鈕銘文。 門外に赤色の土行を有す。
8	阿志岐古墳跡 B部24号墳主体部	古墳前期	福岡県直方郡	11.0	女	鏡背	—	9	宮丸行方。成層銅座。
9	久松古墳跡 田4号室	古墳中期	福岡県直方郡	12.8	福岡県直方郡(行)	鏡背	銅座鈕 1b	10-4b	
10	夕日跡古墳 20号石室墓	古墳前期	福岡県直方郡	16.0	女	鏡背	—	11-4b	
11	夕日跡古墳 6号石室(石部墓)	古墳前期	福岡県直方郡	16.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1? 2	12-4b	銅座銘文。鏡上表面にからし出土。
12	行方古墳跡 環式石室墓	古墳前期	福岡県直方郡	12.4	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	13-14-4b	1935年発掘。鏡背銘文。
13	藤末川ノ上跡 4号石室(環式石室)石室	古墳前期	福岡県直方郡	13.9	福岡県直方郡(宮)	鏡背	銅座鈕 1b	15	鏡は赤で磨かれた。
14	藤末川跡 8号石室	古墳前期	福岡県直方郡	9.8	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1? 7	17-4b	
15	藤末川古墳	古墳前期	福岡県直方郡	13.5	不明	鏡背	—	—	
16	五ヶ丘古墳群	古墳前期	福岡県直方郡	13.3	福岡県直方郡(金)	鏡背	銅座鈕 1b	18-19-4b	同上状況保存不可。
17	藤末川古墳	古墳前期	福岡県直方郡	9.6	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1	20-21-4b	
18	今戸外跡跡群 環式石室群	古墳前期	福岡県直方郡	16.1	—	鏡背	—	22-4b	宮丸行方。
19	石部跡山部古墳	古墳前期	福岡県直方郡	14.0	福岡県直方郡(山部)	鏡背	銅座鈕 1c	23-4b	
20	朝田古墳跡 第3号石室墓	弥生終末	山口県山口市	10.2	—	鏡背銘	銅座鈕 1	24-4b	銘文を欠いているため。鏡背の 行方は不明。
21	石部山 2号銅鏡石室	古墳前期	山口県山口市	12.5	福岡県直方郡(山)	鏡背	銅座鈕 1b	25-4b	宮丸行方。銅座銘文。
22	理田山 15号	古墳前期	山口県山口市	10.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1	26-27-4b-4b	
23	石部山 15号	古墳前期	山口県山口市	12.8	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	28	山上状況保存不可。
24	坂 倉行方土庫	—	高知県高知市	16.4	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1c	29-4b	同上状況保存不可。
25	自衛山 環式石室群	古墳前期	高知県高知市	10.0	福岡県直方郡(倉)	鏡背	銅座鈕 1d	30-4b	不明な点。成層銅座。
26	藤末川古墳跡 前方部環式石室	古墳前期	福岡県直方郡	18.4	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1? 7	31-32-4b-5b-5b	背面は右文倉引による。銅鏡行方 不明。
27	藤末川古墳跡 後方部環式石室	古墳前期	福岡県直方郡	15.5	—	鏡背	銅座鈕 1? 7	31-32-4b	背面は右文倉引による。
28	加茂古墳跡 2号石室(環式石室)	古墳前期	大塚町大塚町	12.0	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b? 7	33-34-35-36-4b	
29	高田山(江原山?)	古墳前期	宮崎県宮崎市	11.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1c	37-38-4b	高野山。
30	今井古墳群 6号墳	古墳前期	宮崎県宮崎市	10.5	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	39	高野山と高野山跡の2個にわたる
31	藤末川古墳	古墳前期	福岡県直方郡	10.9	福岡県直方郡	鏡背	銅座鈕 1b	40-41-42-5b	鏡銘。
32	藤末川 10号墳	古墳前期	福岡県直方郡	12.0	女	鏡背	銅座鈕 1	43-44-4b	
33	新田山古墳	古墳前期	福岡県直方郡	16.0	女	鏡背	銅座鈕 1b	45-46-47-48-4b	

註

1. 三宅米吉 1897「古鏡」『考古学雑誌』1-5 日本考古学会
2. 高橋健白 1909「本邦鏡鑑沿革考（第三回）」『考古界』7-5 日本考古学会
3. 富岡謙蔵 1918「北部九州に於ける銅劍銅矛及び弥生式土器と作出する古鏡の年代に就いて」『考古学雑誌』8-9 日本考古学会
富岡謙蔵 1920「古鏡の研究」臨川書店
4. 中山平次郎 1919「古式支部鏡鑑沿革」5『考古学雑誌』9-6 変形組座（編組座組）を持つものを甲式、四葉座組をもつものを乙式として分類。
5. 後藤守一 1926「漢式鏡」
後藤守一 1977「古鏡聚英」上 東京堂出版
6. 欠島恭介 1943「雙鏡組と獣首鏡とに就いて」『考古学雑誌』33-5 日本考古学会
7. 梅原末治 1925「北朝鮮発見の古鏡」『鑑鏡の研究』臨川書店
8. 前掲註7の本文中では「突帯」。
9. 前掲註7の本文中では「円圈」。
10. 樋口隆康 1979「古鏡」新潮社
11. 高橋徹 1986「伝世鏡と前露品」『九州考古学』60 九州考古学会
12. 立木修 1993「雲雷文帯連弧文鏡考」『季刊考古学』43 雄山閣出版
13. 岡村秀典 1993「後漢鏡の福年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55 国立歴史民俗博物館
14. 前掲註7。「葉紋の尖端は帯を通じてこの部まで及び」とある。
15. 前掲註10。樋口氏の分類に当てはめると「Bcウ」となるが、取り上げられていない。

一覽表文献

- 1) 江野通和・江崎晴隆 2005「調地銅給遺跡」前原市文化財調査報告書89 前原市教育委員会
- 2) 柳田康雄 1983「寺口地区の調査-2号石棺墓」『三雲遺跡』IV 福岡県教育委員会
- 3) 柳田純孝 1974「野方中原遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書30 福岡市教育委員会
- 4) 高倉洋彰 1989「石室出土の遺物-銅鏡」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書209 福岡市教育

委員会

- 5) 森貞次郎 1961「福岡県粕屋郡上大隈平塚古墳」『九州考古学』11・12 九州考古学会
- 6) 森貞次郎・西健一郎・高倉洋彰 1983「上大隈平塚古墳出土の編組座組内行花文鏡」『九州考古学』58 九州考古学会
- 7) 平ノ内幸治 1984「神領古墳群」宇美町教育委員会
- 8) 奥村俊久 1982『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書15 筑紫野市教育委員会
- 9) 山野洋一 1982「阿志岐古墳群」筑紫野市文化財調査報告書7 筑紫野市教育委員会
- 10) 清水比呂之 1988「久原遺跡」宗像市文化財調査報告書19 宗像市教育委員会
- 11) 池辺元明 1980「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告」2 福岡県教育委員会
- 12) 池辺元明 1979「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」28 福岡県教育委員会
- 13) 児嶋隆人 1937「内行花文鏡を出せる箱式石棺の新例」『考古学』8-1 東京考古学会
- 14) 児嶋隆人・藤田等 1973「嘉穂地方史 先史篇」嘉穂地方史編纂委員会
- 15) 柳田康雄 1996「徳永川ノ上遺跡」2 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告7福岡県教育委員会
- 16) 長嶺正秀編 1987「前田山遺跡」行橋市文化財調査報告書第19集 行橋市教育委員会
- 17) 森貞次郎・渡辺正気 1975「滑塚古墳」大牟田市教育委員会
- 18) 宮崎市史編さん委員会 1978「宮崎市史 続編」上
- 19) 宮崎県総合博物館 1980「日向の古墳展 図録」
- 20) 三木文雄 1971「妻島陵墓参考地東宮山古墳の遺物と遺構について」『書陵部紀要』23
- 21) 名本二六雄 1985「愛媛県古鏡の研究史と現在の課題（上）」『遺跡』27 遺跡発行会
- 22) 西岡達哉ほか 1990「一の谷遺跡群」四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 23) 梅原末治 1933「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告12 京都帝国大学文学部
- 24) 山本源太郎ほか 1983「朝田墳墓群」VI 山口

県教育委員会・建設省山口県事務所

- 25) 高倉浩一 1981「石鏡山第2号古墳」『石鏡山古墳群』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター
- 26) 梅原末治 1923「出雲国八束郡岡田山古墳調査報告」『中央史壇』7-5・6 国史講習会
- 27) 山本清・門脇俊彦・松本岩雄ほか 1987『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会
- 28) 後藤守一 1977『古鏡集英』上 東京堂出版
- 29) 倉吉博物館 1983『古墳時代—伯耆国』
- 30) 松本正信・池田次郎・今里幾次 1984「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』4 龍野市
- 31) 梅原末治 1925「武庫郡住吉町岡田の求女塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2 兵庫県
- 32) 渡辺伸行 1984「東求女塚古墳」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 33) 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 1985『加美遺跡現地説明会資料 大阪市平野区加美東6丁目所在』
- 34) 田中清美 1986「加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える』43 古代を考える会
- 35) 大阪府泉北考古資料館 1987「冬季特別展 大阪府の古鏡展」『泉北考古資料館だより』31
- 36) 小田富士雄・柳丸詔八郎・武末純一 1991「弥生古鏡を掘る—北九州の国々と文化」北九州市立考古博物館
- 37) 梅原末治 1920「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査報告』2 京都府
- 38) 後藤守一 1926『漢式鏡』雄山閣出版
- 39) 福島孝行 2001「今林古墳群—今林6号墳出土遺物」『京都府遺跡調査概報』97 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 40) 柴田常忠 1902「美濃国可児郡広見村伊香陵山白山社古墳」『東京人類学雑誌』18-202 東京人類学会
- 41) 小川栄一 1941「陵山古墳」『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』10 岐阜県
- 42) 可見郷土歴史館 1982『特別展図録 郷土の古墳時代』
- 43) 岡崎敬 1978『日本における古鏡発見地名表 東海地方』
- 44) 磐田市史編纂委員会 1992『磐田市史 史料編1』考古・古代・中世
- 45) 後藤守一 1937『上野国佐波郡五村町大字角廻

古墳』『古墳発掘品調査報告』

- 46) 東京国立博物館 1983『東京国立博物館図録目録 古墳遺物編 (関東II)』
- 47) 相川龍雄 1933「佐波郡玉村町角廻山古墳」『上毛及上毛人』156
- 48) 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
- 49) 埋蔵文化財研究会編 1994『倭人と鏡—日本出土中国鏡の諸問題』
- 50) 埋蔵文化財研究会編 1994『倭人と鏡 その2—3・4世紀の鏡と墳墓』
- 51) 白石太一郎・設楽博己編 1994『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集』『国立歴史民俗博物館研究報告』56 国立歴史民俗博物館

参考文献

- 梅原末治 1935『古鏡鑑の新資料二例』『人類学雑誌』50-3 東京人類学会
寺沢薫 2005『古墳時代開始期の暦年代と伝世鏡論(上)』『古代学研究』169 古代学研究会

図版の出版については、一覽表に掲載の文献より引用。一部、縮尺等の改変を行う。

泊一区出土の獣帯鏡

两部 裕俊（伊都国歴史博物館）

I はじめに

県立糸島高等学校には、郷土博物館が設置されており、館内には2千点にもおよぶ歴史資料が展示公開されている。文部科学大臣指定のわか4回唯一の高校付属博物館相当施設であることでも知られている。

館内には糸島地方出土の3面の銅鏡が展示され

ているが、そのうちの1面は展示プレートに前原市泊一区箱式石棺墓出土の記載がある。以前、本館図録で紹介したことがあるが、昨秋、本館で開催した特別展において再び本鏡を間近に見る機会を得たため資料の周知化を図るとともに、今後の検討資料とするため本稿で紹介する。



写真1 泊一区出土獣帯鏡 (3/4)



第1図 泊一区出土獣帯鏡断面図 (縮尺3/4)

II 銅鏡の出土に係る記録

今回紹介する銅鏡が、どのような経緯をたどって郷土博物館に持ち込まれたものかはっきりとした記録は残っていない。昭和31（1956）年に作成された同館の陳列品目録に記載されていないことから、これ以降に持ち込まれたものと考えられ、また、原田大六氏が監修し前原町教育委員会が昭和47年に作成した町の文化財分布地図と文化財地名表にも、この銅鏡に関する記述は見られないので、本鏡の持ち込みはさらにこの後であった可能性が高い。この分布図の作成には糸島高校歴史部の顧問であった大神邦博氏も関わっていたことから、銅鏡が周知のものであれば本鏡に関する情報が記載されていたと考えられるのである。

ちなみに、郷土博物館が所有する他の2面の内行花文鏡はいずれもこの文化財地名表に出土地が記されている。

III 銅鏡の観察

さて、銅鏡は鈕、外区はほぼ完存するものの、内区の4分の1程度が欠損しており、補填材（材質は不明）によって修復されている（写真1）。また、表面に土壌や繊維などが付着していて、文様の詳細な観察は難しい状況にある。

鏡面に付着している繊維をよく見てみるとタイプの異なる2種類の布地であることがわかる（写真2）。

布Aは、細い糸で目を細かく編んだ布が鏡面に貼りつくように付着しており、場所によっては幾重にも重なっている。布Bは、太い糸で織った厚手の布である。後者が前者の上を覆うように貼り付いている。まず、目の細かな布で包みこみ、さらに厚手の布で二重に包まれていたものと考えられる。

付着繊維の材質鑑定は行っていないが、外包の布は麻質の布ではなかろうか。

鏡面と布の上には赤色顔料も付着している。やや暗い赤色の顔料とともに、鮮明な朱赤色の粒子も確認できることから、これも材質の同定は行っていないが、ベンガラと水銀朱が棺内に塗布された可能性がある。

また、鏡や布には粒子の細かな土が塗膜状に薄く付着している。

銅鏡は直径17.7cm、鈕は丈が高い半球状を呈

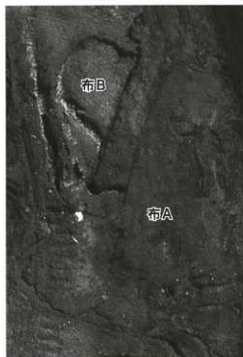


写真2 布付着状況拡大

しており、高さ1.7cm、内区は1.2~1.8mm、外区は外縁で厚さ8.2mm、内側で4.8mmほどを測る（図1）。錆の進んでいない部位では漆黒色を呈し、銅質は良好といえる。

文様の構成は内区では鈕座—圓線帯—櫛齒文帯—獸文帯—櫛齒文帯と続く。鈕座の文様について現状では錆、布などの付着物が厚く覆った状態で、その内容を詳細に観察することができないが、鈕座外帯の内縁には櫛齒文がめぐり、凹帯の間に有節重弧文がめぐっている（写真3）。

主文は、文様の配置関係から、等間隔に配された7個の小孔の間に一体ずつ神獸文が配された構成であろう。各小孔に四葉文が配される。神獸像はそれぞれ、細線で輪郭を描き本体は浮き彫りに表現をとっていることから、七像を環状に配した半肉彫式獸帯鏡と呼ぶことができる。残念なが

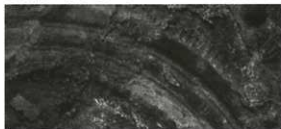


写真3 鈕座外区拡大



写真4 外区拡大

ら各文様とも附着物に覆われていたり、欠損していたりして十分に観察することはできないが、各所に禽獣文の一部を観察することができる。前掲では、1仙6獣と解説したが、とりあえず訂正しておきたい。

外区は、鋸歯文帯—画像文帯となる。画像文帯には流雲文と影絵状の文様の組み合わせで構成されているが、影絵表現は何を表したのかよくわからない(写真4)。

本鏡は鋳上りの良さや文様の精緻さから中国鏡と考えていだろう。岡村秀典氏の分類では、文様は外区が画像文1類、内区主文は獣文を主体として構成されるc類である可能性が高く、浮彫式帯環鏡Ⅱ式に相当するものと考えられる。

IV 出土地の概況

本鏡が発見された泊一区は前原市の北端部に位置し、福岡市西区元岡地区、志摩町馬場地区と境を接し、地形的には、低丘陵の多い糸島半島の根幹部に位置する。江戸時代以前には志麻郡の泊村に属していた。丘陵の南端部は標高5m足らずの水田地帯で、弥生～古墳時代は、丘陵の裾近くまで潟状の内海が西から入りこんでいたため、船舶の停泊地としての「泊」であったことがこの地名の由来となったと言われている。

志麻郡はその名のとおり「島」状に玄界灘に突き出ているが、唯一、泊地区の南で志登地区を介し怡土郡と陸路が通じ、まさに怡土と志麻を結ぶ交通の要衝でもあった。

泊一区には弥生～古墳時代の遺跡、古墳が多く

分布することが知られている(図2)。特に、丘陵上に位置するため、墳墓や古墳の存在が知られる。

弥生時代の遺構としては、棺内に大量の水銀朱を副葬していた後期の泊熊野霊柩墓が有名である。また、弥生中期～古墳前期の集落遺跡である桂木遺跡もある。この遺跡に程近い近い大塚地区では糸島最古の定型化した前方後円墳である御道具山古墳(全長63m)、泊大塚古墳(推定全長75m)が立地する。また、志登地区を見下ろす泊丘陵南端では泊城崎古墳(円墳、調査後消滅)や大日山古墳(未調査・消滅)などもある。

近年、泊一区に隣接する福岡市元岡・桑原地区では、九州大学の移転に伴う発掘調査で弥生時代～奈良時代にかけての遺跡が数多く発見されたことは周知のことである。

残念ながら、現状では、獣帯鏡の発見に関する情報は全く得られていないが、ちょうど昭和30～40年代にかけて、泊一区の丘陵上は蜜柑園が盛んに造成されていた。丘陵はブルドーザーなどによって拓かれ、多くの遺跡が調査を実施することもなく消えていった。前出の熊野霊柩墓もこれら一連の造成工事の際に発見されたとされる。本鏡も丘陵上で行なわれた工事の最中に偶然発見されたのではなかろうか。

V 出土状況について

銅鏡はどのような遺構に納められていたのであろうか。銅鏡表面には布など有機質の遺物が付着していたためか、クリーニングは極力迎えられてい

いたことにより、副葬状況を語る情報が多く残されている。鏡面を再び観察してみよう。

鏡面の各所には青錆が被覆しているが、鏡背面には赤土がペースト状に付着している。また、鏡面に残る繊維は遺存状態が良好で、鏡面との間には隙間がある部位もある。発見される直前まで空隙のある遺構内にあったとみられ、箱式石棺出土というキャプションの記載を裏付ける。

また、表面に赤色顔料が付着することから、主体部内に赤色顔料が塗布・散布されていたものと考えられる。

なお、内区の4分の1ほどが欠損について、これが破砕などの葬送時の祭祀的行為によるものか、何らかの偶発要因によるものか現状では明らかではない。

銅鏡は岡村氏の編年では漢鏡5期に製作が開始され、細線式は四神鏡と、半内形式は画像鏡や神獸鏡に近い特色を有し、浮形式は細線式より後出するとされる。ところが、細線式獣帯鏡は弥生後期の墳墓に副葬が始まるものの、浮形式獣帯鏡は庄内式期に破鏡副葬が開始され、完形鏡の副葬はさらに後れて古墳時代前期に開始されるという顕著な出土傾向差が認められる。

また、泊地区では、2面の銅鏡とともに勾玉1、管玉15、鉄素環頭大刀が出土した大日山古墳の主体部は箱式石棺であったとされ、津和崎権現古墳(前方後円墳・志摩町津和崎・前期)でも箱式石棺から画像鏡1面が玉類とともに出土しており、銅鏡はいずれも完形に近い状態であった。

したがって、本鏡が出土した箱式石棺も古墳時代に属する可能性が高いと考えられる。

VI おわりに

今回の紹介では、資料の表面観察結果を中心に概要を報告するにとどまった。

今後は、糸島高校との連携を図りながら銅鏡の文様や付着物の考古学的・自然科学的な調査を行うとともに、本鏡のよりよい保存環境づくりについても検討していきたい。また、本報告を端緒として、銅鏡の発見から糸島高校搬入までの経過をたどる新たな情報を得ることができれば、望外の喜びである。

参考文献

- 伊都歴史資料館 1992「伊都・古代の糸島」
- 伊都歴史資料館 1997「再見！糸島の博物館」
- 前原町教育委員会 1972「前原町文化財地名表」
- 福岡県教育委員会 1980「福岡県遺跡分布地図」
- 岡村秀典 1993「後漢境の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
- 樋口隆康 1975「古鏡」平凡社
- 後藤守一 1926「漢式鏡」雄山閣
- 高橋徹 1994「桜馬場遺跡および井原縄溝遺跡の研究」『古文化談義』第32集 九州古文化研究会



図2 泊一区周辺の地形 (1/10,000)

伊都国歴史博物館紀要 第2号

発行日 平成19年3月31日

発行 伊都国歴史博物館
福岡県前原市大字井原916番地
TEL 092-322-7083

印刷 株式会社 重富印刷



